山崎郷土研究会報

No. 86
7. 9. 10
兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話 62-2000

明治初年の話(7)

堀口春夫

明治五年正月、藩主なきあと民政局第三出張所長小国英定は、家中一統を殿中広間に呼び集め年始挨拶の後左の如く述べた。

「さて各々方此度は天長の命により、廃藩置県となり、飾磨県となり申した。よって各々方の家禄は停止され、官員以外は一切無きものと心得られよ、……去る庚午四年藩主在国の砌りより各々方の身の振り方として帰農帰商を度々奨励されたるにもかかわらず、今もって一向にはかどらず、のうのう（能々）と徒食されるは心外で御座る、併しながら今性急に帰農帰商を申立てても何等かの資金なくしては転業も出来ぬこと故、各々方の食禄召し上げのみかえりに奉還金として今日より勘定所にて資金を渡す事とす、資金は太政官札である」

と言って手の切れる様な金禄公債証書と紙幣の見本を見せた。そして、懐ろより「下」と墨書した奉書を取り出しうやうやしく拝礼し「これは天長様より賜る全国士族一定の奉還金である。」と前置して左の如く読上げた。

「士族を家格に従い三段階とし、一、二等級の家老用人級は千円、三等級より五等級までは五百円、それ以下の士族は三百円、仕丁以下の平足軽は、平民に列し百円を支給す、是によって各々方は速やかに身の振り方をきめられよ、」

と申し渡された。

目次

① 明治初年の話(7) ……堀口春夫…1
② 佐用郡の梵鍾 —南光町の梵鍾を中心にして— ……片山昭悟…7
③ 年貢米銀仮割張(2) —尼崎藩庄屋文書— ……久保寅夫…16
④ 讃岐路研修旅行記 ……志水美好…22
⑤ スクイム市訪問記 ……大谷司郎…24
⑥ 鹿沢城搦手（からめて）門石碑の設置について ……史跡部…28

一統騒然として、中には質問する者もあった。

「民政殿……太政官紙幣と言っても不換紙幣、世情では人気が悪く紙切れの如き金禄公債証書は果して通用するので御座るか、噂では両替所も貨幣と交換してくれぬと言うではないか、なんとか銀貨で貰えぬものか…」

「それは出来ぬ…」…

「それはおぬし等の力次第で通用さすので御座る、各々方はそんなに太政官を信用されぬのか、太政官紙幣は政府の発行する紙幣である。政府を信用せずして何とするぞ。不服の者は受け取らぬも勝手次第、通用は各々方の権力で押し通すので御座る。」

後は何と言っても不問不答…

「詳しき事は勘定方で聞くが良い」

と英定は早々と引き上げた。

実はこの証書に附随した太政官不換紙幣は乱発して始めは全く不人気で銀貨は一般に喜ばれたが紙幣は造幣局で溜る一方であった。そこで、この処置にこまり、これを全国の失業士族の奉還金に与え、武士の既成勢力でもって強引に使用させ、政府の通貨を信用させようとする政策でもあった。もしこれが当たれば貧乏士族も一時は大金を握った事になる。全国一定とあれば、大藩の高禄者は別として小藩の微禄者にとっては全く有難い次第であった。何しろ米一升が三銭五厘の時代である。一円札と言えば大金であった。

ところが当時この金札に目を付けた土地の侠客と自称する博徒の親分衆が気前良くこの紙幣を通用させたのである。

博打には勿論の事山崎の地元でも料亭を開き、城崎から温泉芸者を呼び寄せて、気前良く飲食させ遊ばせる。上級士族の中にはこれに気を良くして札びらを見せて散財する者もあった。侠客達もまた気前良くこの金を使う。紅灯の巷は賑わい町の景気も上昇する。次第に町の商人もこの紙幣を信用し始め、通貨は上々の向きとなった。この傾向は全国何れも同じ有様であったと思われる。

また、士族の中でも物堅い人は田畑を買って帰農する者も出てきた。なにしろ田圃一反が五十円程で買えたのであるから、御一新以来田畑売買禁止の令が解かれ、不作で田を売り逃散する百姓もあって、地主も小作人不足でこまっていた頃で、武士の百姓転還は容易であった。

しかし、これも慣れない百姓仕事は武士には長続きせず、田持ちになったもののやはり百姓に小作してもらうようになる。

また、一方士族の奉

外科・内科

山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL62 0036

還金に目を付けた詐欺師が横行し、生野銀山は政府の鉱山局の支配となり、イギリス人留学者コワニェを鉱山司に招聘して近代式坑法に切り変え採掘されていたが、富土野銀山は一時廃坑していた。それに詐欺師がつけ込んで富土野鉱山を復興させ、株式会社を設立すると話しかけて来たのである。

士族の連中は幕府支配時代明延鉱山で銀や錫を採掘していた事をなまじ知っていただけにこれは有望と思い込み、行先生活不安に戸惑っていた矢先とて話に誘われ、

「ひと株壱円。」何株でもよろしい、五百株も持っていたら旦那方株主で手をよごす事なく配当金で一生遊んで暮らせますぜ…」

と、言葉巧みに話しかけ、立派に刷り上げた株券には大阪の豪商人の名を連ね、「私はそこの番頭だすねん」と信用させた。是れにはかなり多くの士族が信用して身分相応の株を持たされた。上級士族程多く引かかった。あげくの果ては金の持ち逃げにあった。欺されたと気付いた時はもう既に遅く、士族の商法は甘いものと逃げた詐欺師は舌を出していた事であろう。

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします
神姫観光
〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
（神姫バス山崎待合所内）
TEL（0790）62−7588
FAX（0790）62−7589

また武士の転業は下級の者程早く、仕丁と称する平足軽は一代抱えの者が多く非番の時は常に内職として竹細工の籠、樋、下駄作り、畳表莫蓙（ござ）作りなどに手慣れた者はその職人に転向した。帳付足軽は達筆であったので物書として、代書人に雇われ、仕込み上乗の足軽は船頭や人力車夫等に、杖突は警察屯所の邏卒等に転業した。中級士族は寺小屋の師匠や戸長役場の書記になったり、学校教師等になったり、また中には奉還金を出し合って共同で風呂屋（銭湯）を開業した人もあったが入浴客は其の日暮らしの労働者が多く、月借りの切符で金払いが悪く何れも長続きはせず止めてしまった。

士族の商法とはこの様な有様であり貧乏して奉還金の大方を使い果たして上方へ出て行く人も多かった。そこで政府は失業士族の授産所を各地に設置奨励し地場産業を起こさせた。山崎でも大成社と言う授産所を設け、養蚕を奨励し、城内の元武器庫を開放して家中の子女に繭の糸取りをさせ、男は山畑を開墾して桑作りに専念し、屋敷の中や道路の半分まで桑を植付け、又桑の葉や繭の仲買人となり出歩いた。

また養蚕技師を招いて養蚕伝習所を設け養蚕業を広めた。これが後に郡是製糸工場を誘引した原因の一つでもあった。しかし、士族の養蚕は長続きせず一部の農家に伝わったものの、大成社は明治二十年頃倒産してしまった。また、士族の中でも元普請奉行

であった岡本氏は屋敷の中に下駄工場を造って多くの工人を使って一時成功した。

また経済にすぐれた人は奉還金（金禄公債）を持ち寄って有力商人とも提携して本町に金券山崎銀行を建てた人もあった。

しかしながら多くの士族は次第に窮乏の一途をたどり明治九年頃には金券秩禄（ちつろく）公債は廃止となり空手形となってしまった。全国的にも士族は窮乏のどん底に落ち、各地に士族の反乱が起こった。

山崎でも家族の多い家は三度の食事にもこと欠き、飢えた子供達は母親の顔をうらめしげに見て

「朝も粥、昼も粥、晩は食わずに寝るの粥、」

と云って飢えに泣く児を母は見て、居たたまれず里方の林田まで夜通し歩いて米を借りに行った人もあった。まことに赤貧洗うが如き有様であった。

また少し溯って明治五年八月政府は学制頒布の触れを出し、「家に不学の子弟無く、村に不学の人無からしめん事を期す」、と称し、国民全体に就学の義務を負わせた。

山崎でも元藩学思斉館を思斉小学校として一般にも開放し、良く出来る児は士族に限らず入学を許した。

また町にも妙勝寺に、文友学校、青蓮寺に、訓蒙学校、光泉寺に小竹辺学校、前野氏宅に渓流学校等々五カ所の寺小屋式学校があって、教師は町年寄浪人旧藩士等が教えた。教科は読み、書き、算盤を主体とした。義務教育と言っても当時の就学率は悪くたいてい二～三年でやめる児が多かった。その点家中の子弟はこれからの世の中は学問の世の中であるから、いくら貧乏でも勉強だけはさせねばと就学率は良く、また、明治九年には寺小屋式学校も思斉小学校に合併し篠陽小学校として本多氏の藩邸、上屋敷を提供し発足した。

また、明治六年には徴兵令が布告され全国に六鎮台の軍管区を定め男子国民満二十才になれば、家の長男、また一人っ子を除き、皆徴兵検査を受け、合格者はそれぞれの鎮台府に入隊させた。兵庫県は大阪第四鎮台に入営させた。

これより各地に徴兵反対の一揆が起こる。一方陸軍大将参議西郷隆盛は全国失業士族の救済策として士族の若者を軍隊に志願させ、朝鮮に出兵さす征韓論を主張した。しかし、この意見は多くの反対者と対立し遂に阻止されてしまった。

征韓論に敗れた西郷は官を辞して郷里鹿児島に帰郷し、私学校を建てて多くの若者の指導に当った。

これによって維新以

表装全般・新調修復
…古いものを大切に…
表具師 松本永昌堂
山崎町鹿沢本通り
TEL62-0122

来抜群の功績のある西郷の処遇に不満をいだく鹿児島出身の士族達は西郷の人格を慕って続々と官を辞し、郷里へ引き上げて行った。

西郷隆盛が唱えた征韓論は無謀とは言えども、農商にいそしむ若者を無理に徴兵した兵隊よりも、日頃武を錬った全国失業武士の若者を兵に志願させた方が役に立ち、失業救済と富国強兵に撃がる策であると考えたのであった。

戊辰戦争以来命を懸けて戦った薩摩の勇士達も帰農した者は生活には苦しんでいた。

郷土鹿児島では西郷隆盛の人気は絶大なるもので、西郷の意見書を今一度政府の高官に突き付けるべく薩摩隼人は意気軒昂、遂に明治十年二月に西南の役が勃発した。私学校のいきり立つ生徒をなだめる隆盛を無理やりに押し立てて軍隊を編成し第六軍管区熊本鎮台に迫った。当時熊本鎮台師団長は土佐出身の谷干城であった。迎え討つ官軍もよく戦ったが、薩摩の賊軍の勢い強く田原坂の激戦に官軍は散々に敗れて熊本城に籠城した。政府も早速第五軍官区第四軍官区の鎮台兵を援軍に送り込んだ。が、鹿児島士族の軍勢に至る所で敗れ官軍の志気は揚がらなかった。

当時のはやり唄に「大阪鎮台弱鎮台、又も負けたか八連隊」などと言われた。大阪八連隊は大阪商人の子弟が多く装備は近代化していたが体力がなく白兵戦はだめだった。それに相手は戊辰以来歴戦の薩摩士族で示現流を誇る勇猛果敢の若者達だった。そこで政府は徴兵制の軍隊に変って剣豪部隊を編成すべく全国の士族に抜刀隊の志願を募集した。

「全国の士族諸君！腕に覚えある勇士はこぞって集り来たれ、出世の糸口は今此処にあり…」

と全国に檄文を配布した。

そこで失業と困窮にあえぐ武士達はこの紙切れを手に奮い立った。東京を始め各地から続々と応募して来た。

山崎でも、私の祖父は当時三十歳を過ぎていたが鳥羽伏見の合戦で薩摩勢に煮え湯を飲まされた経験者だけに同志と語らい、あの節は薩摩の錦旗に対し賊軍にされたが今度は官軍として戊辰以来の仇を討つは此の時とばかり誘いあって十数人長剣を背負い兵庫の港の募集地に向った。集まった者も新陰流などの免許皆伝を持った者は無条件で採用されたが、その他の者は応募者の勝抜試合に勝った者が合格採用された。

しかし、抜刀隊は三十歳末満の若者と決められていたので三十

HOME CENTER
アグロ
佐用店
福崎店
赤穂店
山崎店
龍野店
上郡店
太子店

過ぎた年輩者は予備軍の抜刀巡査で採用され第四旅団に編入された。しかし幕末以来の剣客は大方が三十を過ぎていたので第四旅団の実力は大いに期待されていた。

最初に選抜された広島、東京の抜刀隊は急きよ熊本に送られ参戦した。

賊軍に包囲され兵糧攻めに合った熊本鎮台の城兵もよく堪え忍んだ。谷村圭介が厳重な包囲網をくぐりぬけ援軍を要請した話は有名である。包囲を破ろうと官軍兵の射撃、砲撃の間を縫って抜刀隊も勇敢に斬り込みをかけた。特に夜間の襲撃斬り込みは凄まじくこの抜刀隊の働きによって城を十重二十重に囲んだ薩摩の士族隊もついに傷つき倒れ、城の囲みを解いて退却し始めた。浮き足立った賊軍はつぎつぎと官軍の新手の追撃隊に攻撃され、さすがの西郷も重い腰を上げて故郷鹿児島をさして落ちのびて行った。

第四旅団が側面を突こうとして宮崎に上陸した時は、薩摩軍のほとんどは通り過ぎた後でその後彼等は鹿児島の城山に立籠った。

当時抜刀隊のはやり言葉に、「西郷隆盛鰯か雑魚か鯉（隊）に追われて逃げて行く」と唄われた。

西南の役も明治十年十月には西郷は城山に自刃して終わった。暫くして第四旅団も兵庫の港に帰還した。隊員の多くはそのまま巡査になった者が多かった。

祖父も兵庫県巡査を拝命し、兵庫署の剣道世話方になり署員の剣術指南役をした。抜刀隊の若者は士官学校に進む者また陸軍戸山学校や陸軍教導団騎兵学校に入学する者等々将来軍人になる者が多かった。

これに先だち明治九年には断髪廃刀令が出され、帯刀は厳しく取り締まられた。年寄りはまげを切り落し難く残す人も多くあり刀も当分は脇差だけを差していた。また中には刀は武士の魂ゆえ、帯刀がだめなら刀を背に負えば文句はあるまい、と屁理屈を言う者もいた。

しかしながら、士族の窮乏はなかなか救う事が出来ず、職を求めて離散して行く者も多く、家中の屋敷も櫛の歯の欠ける如く空屋敷となり親しかった親族や近所の人とも離別し、別れの挨拶に涙を流す日が多く、行く者、残る者何れも淋しい思いをしたと言う。

職に就けなかった者は次第に零落して諸国をさまよい、もし世が世であれば立派な家系にあるお嬢様が苦界に身を落とし、紅燈の陰に泣くあわれな人もあったと言う。

佐々木信綱の歌ではないが、「剣を負うて落魄ここに二十年、吾

株式会社
安井書店
宍粟郡山崎町山崎90
TEL山崎㊷0700(代)

が髪白し秋の風吹く」

（明治の話完）

佐用郡の梵鐘

—南光町の梵鐘を中心にして—

片山昭悟

今回、上三河の光福寺喚鐘・漆野の光福寺喚鐘・船越の瑠璃寺梵鐘について紹介する。

(1) はじめに

今から二百三十～百五十年前の江戸時代中期にあたる明和・寛政・文化・天保年間にかけて、宍粟郡金屋鋳物師として活躍した長谷川孫兵衛は、山崎町船元一雲寺喚鐘・桓武伊和神社の梵鐘、小茅野位尾神社の梵鐘、大沢円通庵の喚鐘はじめ多くの梵鐘、喚鐘を長谷川五郎兵衛が作っている。

佐用郡南光町上三河の光福寺喚鐘は、昭和十七年（一九四二）に太平洋戦争で供出されていたが、姫路市飾磨区の妙善寺に現存していたことから、平成四年に里帰りしたもので、宇野正硯先生よりこの鐘も金屋鋳物師長谷川氏によるとご教示いただいたことから、平成五年三月に、光福寺前住近藤文郷氏のご厚意により観覧させていただく機会に恵まれたので、ここに概略を紹介する。

佐用郡南光町上三河ならびに漆野は、昭和三十年（一九五五）まで、宍粟郡三河村であり、宍粟郡の梵鐘を考える上でも重要である。

佐用郡南光町寺院 位置図

(2) 上三河光福寺喚鐘

南光町上三河・光福寺の喚鐘は、天保二年（一八三一）の鐘で現存している。

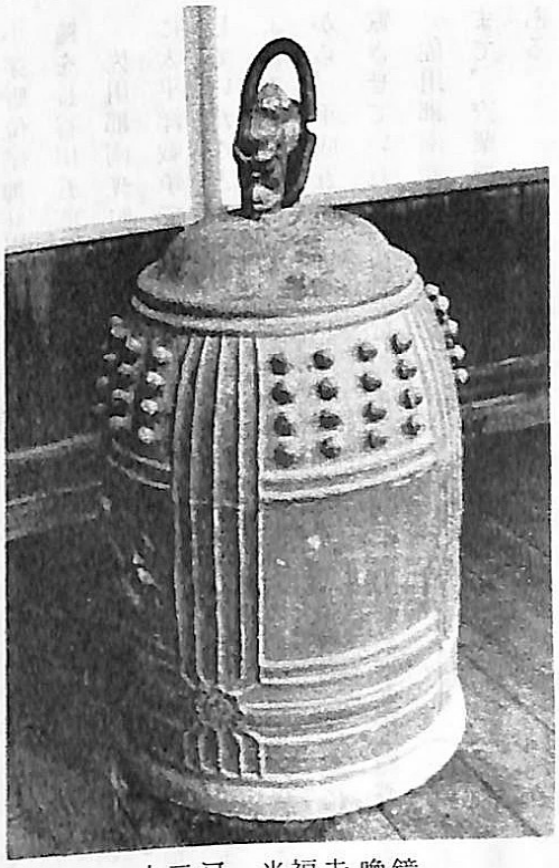
光福寺喚鐘銘

勅許左方惣官御鑄物師

當國宍粟郡住

大工職長谷川孫兵衛

藤原恆光



上三河　光福寺 喚鐘

撞　座

延享二（一七四五）乙丑二月興文
天保二（一八三一）辛卯五月再興

同國同郡上三河村
光福寺什物
第八世深禮
願主　惣門徒中

鐘銘によると

「勅許　左方惣官御鑄物師
當國宍粟郡住
大工職長谷川孫兵衛
藤原恒光」と陰刻されている。

長谷川氏の梵鐘・喚鐘の中では、「勅許　左方惣官　御鑄物師」と刻むのは、この鐘のみである。

長谷川孫兵衛の中で「藤原恒光」は、現存するものとして初出である。

『山崎町史』第七章鉱工業第四編近世第三節鋳物業宇野正硯「梵鐘銘に残る長谷川氏」によると、

天保四年（一八三三）　明宝鐘　長谷川孫兵衛藤原恒光として紹介されている。

光福寺鐘の二年後である。明宝寺鐘は安政の大砲製作のため供出され、現存していない。

光福寺の喚鐘は、江戸時代の長谷川氏製作による鐘で現存するもっとも新しいものである。

長谷川氏の鐘で、「大工」と刻むのは、明和七年（一七七〇）上ノ観音堂喚鐘、明和八年（一七七一）岩上神社鐘にみえる。

1.上ノ観音堂鐘

「播州宍粟郡金谷村住

大工　長谷川孫兵衛藤原吉正作之」

2.岩上神社鐘

「大工同國同郡金谷村住人

長谷川孫兵衛藤原吉正

〃　五郎兵衛藤原家次」

村内政雄「由緒鋳物師人名録」『東京国立博物館紀要』七号東京国立博物館一九六八によると、

長谷川孫兵衛・長谷川五郎兵衛には、当時鋳物師を統率していた真継家当主量弘より、明和八年（一七七一）十一月に「鋳物師許状」が発給されている。

十年後の安永十年（一七八一）二月に、二年後の天明三年（一七八三）には、真継家主康寧になるとすぐに「大工職」・「鋳物師許状」が発給されている。

また、この鐘には「惣官御鋳物師」と陰刻されている。

中川弘泰「近世の鋳物師と真継家」『日本の歴史』第二六六号一九七〇によると、

真継家は、支配の鋳物師同士の市場争いを防止するために各國に「惣官鋳物師」をおき、その国の統率を認めたのであり、「大工職」を一国一郡において、その郡の営業独占権を認めさせていたのであり、光福寺鐘にみえる「惣官」の鋳物師は、三郡ぐらいの大工職を所有していたとされる。

長谷川氏は、宍粟郡・佐用郡・揖西郡の大工職であったのではないか。

なお、坪井良平『日本の梵鐘』によると、播磨野里鋳物師の芥田氏は、永禄十一年には野里村鋳物師惣官職・播州国中鋳物師総官職を許可されている。

この喚鐘は、総高五九cm・口径三三、八cm厚三cm・龍頭は十一cm、の小型の双頭式龍頭で上に宝珠が付く、池の間に鐘銘を陰刻する。池の間には天女が陽鋳され、草の間に蓮の花が、撞座は単弁八葉の蓮華紋である。

近藤氏のご教示によると、光福寺の梵鐘も安永三年（一七七四）長谷川孫兵衛の作であったとされる。

安永三年には、山崎町大沢の円通庵鐘を作っている。

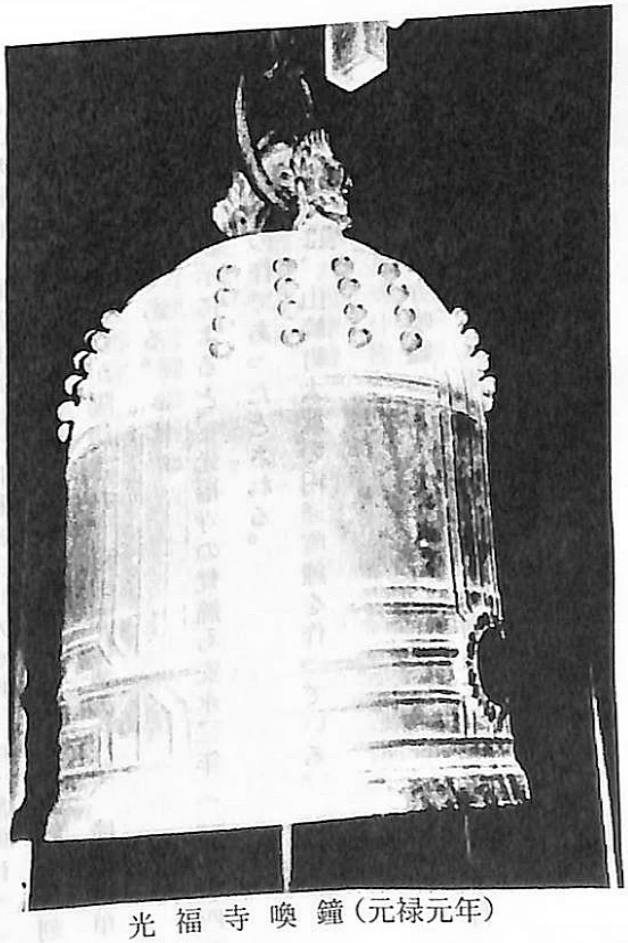
(3)　漆野光福寺喚鐘

佐用郡南光町漆野、兵庫県指定天然記念物の大イトザクラで有名な光福寺の喚鐘は、

「元禄六癸酉年（一六九三）十一月十六日」

「冶工　大坂住　岸本七右衛門吉久」の作である。宍粟郡の喚鐘・梵鐘では、「岸本七右衛門吉久」は初出である。岸本七衛門吉久は、大坂住で、「摂津大坂高津住」「大坂住南瓦屋町」の鋳物師として知られる。

南光町漆野　光福寺　遠　景



光　福　寺　喚　鐘（元禄元年）

坪井良平氏の『梵鐘と古文化』によると、和歌山県伊都郡高野山光明院には、元禄十四年（一七〇一）の鐘があり、「冶工接（摂カ）州大坂住岸本七右衛門尉藤原吉久」とある。

光福寺の喚鐘は、元禄六年岸本七右衛門吉久の作であり、播州完粟郡漆野村と陰刻されている。

完粟郡名の現存する喚鐘では、江戸時代最古のものである。

これに次ぐものは、元禄十年（一六九七）の山崎町中野・極楽寺喚鐘、一宮町福知・大徳寺喚鐘が知られる。

宍粟郡の梵鐘を考える上で貴重な資料である。

光福寺喚鐘銘　　南光町漆野

播州完粟郡漆野村
光福寺淺貞
法名　志　名祐
施主漆野村吉兵衛
元禄六癸酉年
十一月十六日
冶工大坂住岸本七右衛門
吉久

計測

総高	64.5 cm	
鐘身	44.5	
笠形	6	
龍頭	14.5	
口径	37.8	
縁厚	4	
乳	4段	4列

漆野光福寺撞座

(4)　瑠璃寺の梵鐘

船越山瑠璃寺は、眞言宗の寺院で、神亀五年（七二八）聖武天皇の勅命により、行基が開創したとされる。

梵鐘は鐘桜堂にひっそりと吊り下げられている。

兵庫県指定文化財工芸品である。

南北朝時代の応安二年（一三六九）の作で、（南朝の正平二十四年にあたる）銘文には、

「播州完粟郡佐用庄千草郷」

とあり、かっては宍粟郡佐用庄であったことがわかる。

『播磨鑑』によると「赤松律師則祐の一族覚祐法師又七堂伽藍を建立せり、應安年中に落成す」とあり、『兵庫県宍粟郡誌』によると「大願主権律師覚祐」について「赤松次郎茂則の末子権律師覚祐を中興の開祖」とされる。

「大檀那権律師則祐」は、高坂好氏の『中世播磨と赤松氏』一九九一によると、赤松則村の三男で、上郡町河野原の宝林寺を延文二年（一三五七）に創建している。播磨守護職であった。

大工の大江景光は、坪井良平氏の「播磨の古鐘とその鋳物師」『兵庫県の歴史』⑭ 一九七六によると、姫路野里鋳物師で、最古の梵鐘とされる。

大江氏は、室町時代の鐘に筑前芦屋鋳物師としてみえる。

この頃の梵鐘は、貞治三年（一三六四）の加西市酒見寺の鐘が知られる。

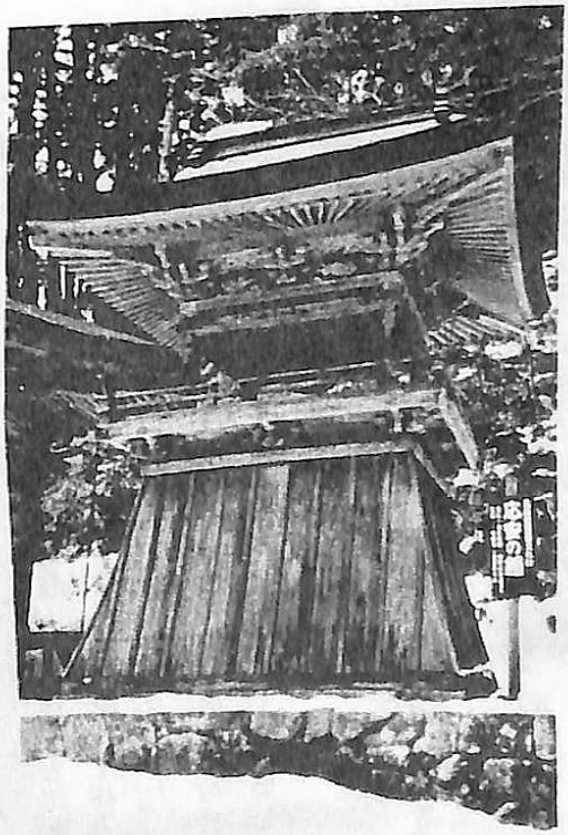
瑠璃寺梵鐘銘

播州完粟郡佐用庄千草郷
船越山瑠璃寺推鐘
大願主権律師覚祐
衆徒等同心
大工　大江景光
大檀那権律師則祐
沙弥世貞
菅原氏女
源　氏　女
藤原忠宗
沙弥法圓
比丘尼妙圓

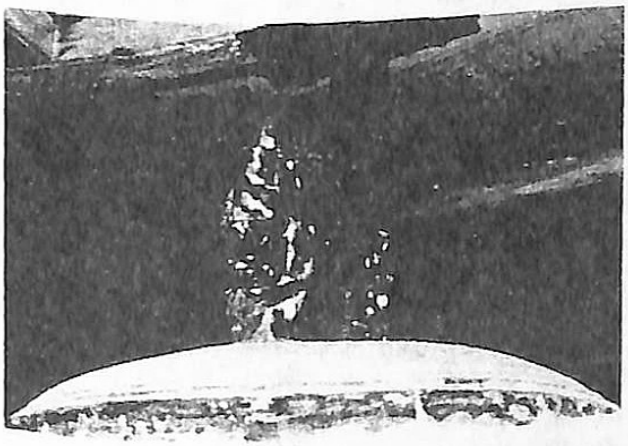
應安二年己酉八月日

法量は総高九八、五cm、口径五六、六cmを測り、乳は四段四列笠形の周縁に二条の同心円をめぐらし、上帯が四区画をなす。龍頭は双頭式で宝珠がつく。撞座は複弁八葉蓮華紋の美しいものである。

また、「播州完粟郡船越山金口鐘事　願主覚祐　沙弥法圓比丘尼妙圓」「永和二年（一三七八）戊午十一月十五日　大工藤原貞弘」の銘文のある鰐口が知られる。

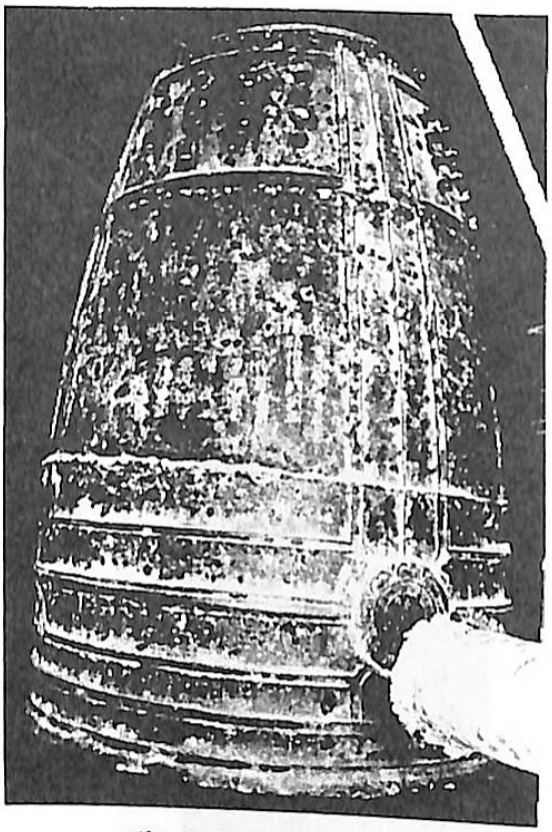


瑠璃寺鐘楼

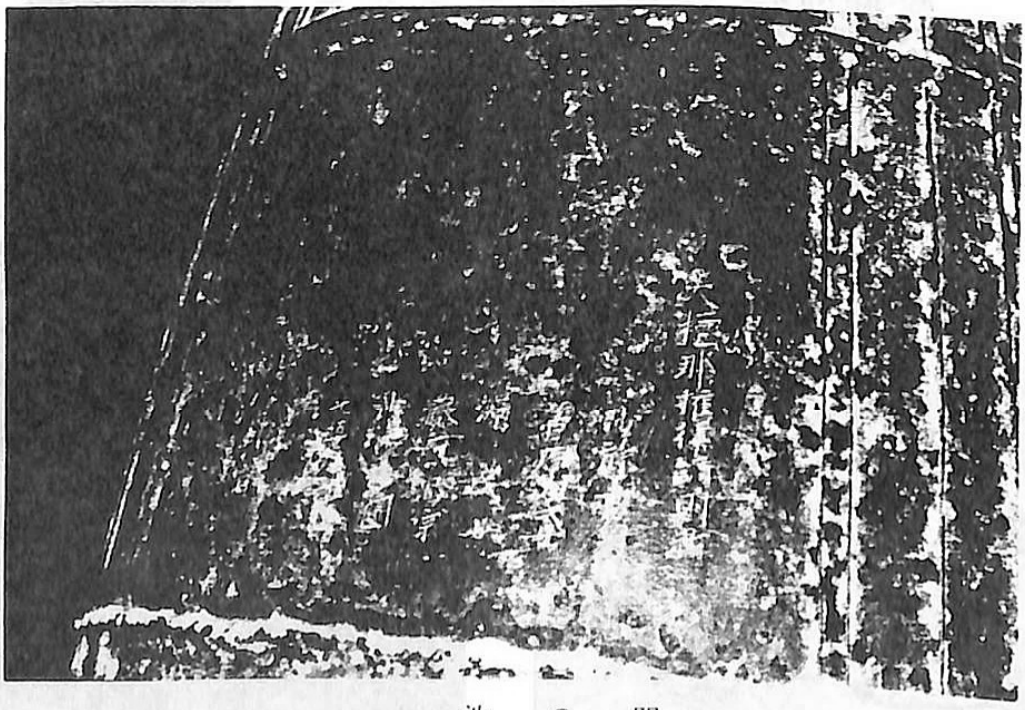


笠形ならびに龍頭

撞　座



瑠璃寺梵鐘（応安二年）



池　の　間

船越山瑠璃寺本堂正面にある鰐口は、永和四年（一三七八）の南北朝時代のものであり、県指定工芸品である。

この鰐口は現在、兵庫県立歴史博物館に展示されている。

特徴は三重の同心円がみられ、中央には複弁八葉の蓮華紋の撞座である。

径五三、五cm　厚十五cm

大願主は覚祐であり、大工は藤原貞弘である。

なお応安二年（一三六九）の梵鐘にも覚祐の名が陰刻されている。

瑠璃寺鰐口　（南光町瑠璃寺蔵）

播州完粟郡船越山金口鐘事　大願主覚祐　沙弥法圓

比丘尼妙圓

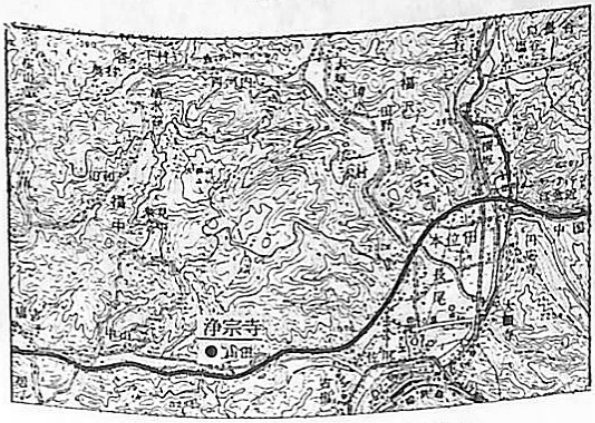
永和二年戊午十一月十五日　大工藤原貞弘

(5)　資料紹介

佐用郡山田村浄宗寺明治時代の喚鐘（長谷川五郎兵衛による）

撞　座

浄宗寺　喚鐘



佐用町山田 浄宗寺位置図

浄宗寺喚鐘銘

播磨國佐用郡山田村
真宗浄宗寺什物

鑄工當國宍粟郡
山崎住
長谷川五郎兵工

※明治十二年十二月上旬梵鐘ヲ鑄造シ時ニ在来
喚鐘ヲ改鑄セシモノナリ

長谷川五郎兵衛　集成（明治時代）

1. 岡山県勝田郡勝間田町　正行寺鐘　明治十二年（1879）　長谷川五郎兵衛
2. 佐用郡佐用町　浄宗寺鐘　明治十二年（1879）　長谷川五郎兵衛（現存）
3. 揖保郡新宮町　心光寺鐘　明治十三年（1880）　長谷川五郎兵衛
4. 岡山県英田郡作東町　本教寺鐘　明治四三年（1910）　長谷川五郎兵衛

2は安富町建部惠潤先生よりご教示いただき、平成四年九月二十三日調査する。

1・3・4は坪井良平「徳川期における播・但両国の鋳物師」
—主として直島製煉所の資料による—
『兵庫史学』第37号　昭和39年より

(6) まとめ

梵鐘の魅力にとりつかれて、宍粟郡内の長谷川孫兵衛・長谷川五郎兵衛の梵鐘・喚鐘を中心にして一つ一つ調査を行って写真撮影や銘文調査などを試みた。

そして多くの方々のご協力により、新たに長谷川氏の喚鐘を発見することができ、『山崎郷土研究会会報』に概略を紹介させていただいた。

金屋鋳物師長谷川氏は、佐用郡ともつながりがあり、三河村の梵鐘について紹介させていただいた。

なお、佐用町山田・浄宗寺の喚鐘は、明治十二年改鋳で長谷川五郎兵衛の作である。

今後も宍粟郡の梵鐘について、金屋鋳物師長谷川氏をもとに調査研究することによって少しずつ解明できればと思っている。

年貢米銀仮割帳(2)

—尼崎藩庄屋文書—

久保寅夫

安政五年の上町村「年貢米銀仮割帳」の前回の続きを掲載します。

かの組
重右衛門

一高弐石弐斗壱升六合
内壱升五合　引
残高弐石弐斗壱合
内八升六合　上田引
〆　弐石壱斗壱升五合
米成八斗六升七合
一銀壱匁三分九厘　。小もの成
一〃四拾五匁三分　先割
一壱匁之分　。通人別
入三拾九匁五分四厘　去過之分入
入五匁九分四厘　。被下米代

治右衛門

一高壱石六斗三升三合
内四升四合　引
残高壱石五斗八升九合
内六升九合　上田引
〆　壱石五斗四升
米成六斗四升三合
一銀三拾弐匁五分　先割
一〃壱匁三分　。通人別
〆　三十三匁八分
入拾七匁六分六厘　。去過之分入
入四匁弐分七厘　。被下米代

久蔵

一高壱石八斗九升
内壱斗　上田引
〆　壱石七斗九升
米成七斗三升四合
一銀壱匁八分三厘　。小もの成
一〃三拾八匁三分　先割
一〃壱匁九分　。通人別
一拾弐匁九分六厘　。去不足之分
入六匁三分　。被下米代

三治郎組
ふき

一高壱石四升九合
内三升四合　引
残高壱石壱升
内弐升九合　引
〆九斗八升壱合
米成四斗弐合
一銀六匁七分五厘　。小もの成
一〃廿壱匁　先割
一〃壱匁五分　。通人別
一〃廿三匁八分四厘　。去不足之分
〆五拾三匁壱分四厘

弥十郎

一高七斗七升六合
内壱升弐合　引
残高七斗六升四合
米成三斗壱升三合
一銀壱匁九分三厘　。小もの成
一〃拾六匁三分　先割
一〃壱匁三分　。通人割
〆拾九匁五分三厘
入弐匁壱分五厘　。被下米代

惣右衛門

外ニ高四斗四升三合豊蔵組里なへ譲り
一高六斗七升七合
内七合引
残高六斗七升
内壱升六合　上田引
〆六斗五升四合
米成弐斗六升八合
一銀壱匁弐分四厘　。小もの成
一〃拾四匁　先割
一〃弐匁八分　。通人別
一〃廿目弐分九厘　。去不足之分
〆三拾八匁三分壱厘
入壱匁八分四厘　。被下米代

佐五郎組
佐右衛門

一高六石九升壱合
内七升九合　引
残高六石壱升弐合
内壱斗七合　上田引
〆五石九斗五合

米成弐石四斗四升壱合

一銀七分三分三厘　。小もの成
一〃百廿六匁四分　先割
一〃弐匁弐分　。通人別
〆　百三拾五匁九分壱厘

入五匁四分五厘　。去過之分入
入拾六匁五分九厘　。被下米代

磯左衛門組
健　蔵

一高拾弐石四斗八升八合
　三升七合　永引
　三升壱合　△△
残高拾弐石四斗弐升
　内五斗九升弐合　上之上田引
〆　拾壱石八斗弐升八合
　米成四石九斗四升九合

一銀三匁九厘　。小物成
一〃弐百五拾三匁壱分　先割
一〃弐匁弐分　。通人割
〆弐百五十八匁三分四厘

入拾六匁三分七厘　。去過之分入
入三十三匁弐分四厘　。被下米成

五郎左衛門組
な　つ

一高四斗三升九合
　内壱升壱合　上田引
〆　四斗弐升八合
　米成壱斗七升五合

一銀三分三厘　。小もの成
一〃九匁弐分　先割
一〃壱匁三分　。通人別
一〃四拾三匁五分七厘　。去不足之分

入壱匁弐分　。被下米代

源右衛門

一高七石壱斗一升
　五升四合　永引
　内三升弐合　みぞ引
残高七石弐升四合

内壱斗弐升九合　上田引
〆六石八斗九升五合
米成弐石八斗弐升七合

外ニ六匁歛に付
一銀六匁壱分壱石　。小物成
一〃百四拾七匁六厘　先割
一〃弐匁弐分　。通人別
〆百五拾五匁九分壱厘

入百六匁四分三厘　。去過之分入
入拾九匁三分七厘　。被下米代

源五郎組
辰之助

一高五斗五升三合
内三升　引
残高五斗弐升三合
米成弐斗一升四合

一銀三匁九分壱厘　。小物成
一〃拾壱匁弐分　先割
一〃壱匁三分　。通人別
一〃四拾六匁四分五厘　。去不足之分
〆六拾弐匁八分三厘

入壱匁四分七厘　。被下米代

原三郎組
長蔵

外高弐石壱斗五升九合三郎兵衛へ入ル
外高壱升七合甚七へ入ル

一高七斗五升
内壱升　引
残高　七斗四升
内壱升壱合　上田引
〆七斗弐升九合
米成弐斗九升九合

一銀弐匁壱厘　。小もの成
一〃拾五匁六分　先割
一〃壱匁九厘　。通人別
〆拾九匁七分壱厘

入廿三匁九分八厘　。去過之分入
入弐匁五厘　。被下米代

平七

一高八石七斗五升三合
内壱斗三升三合　引

残高八石六斗弐升
内三斗三升弐合上田引
〆八石弐斗八升八合
米成三石三斗九升八合

一銀三匁　　。小もの成
一〃百七十七匁四分　　先割
一〃壱匁九分　　。通人別
〆　百八拾弐匁壱分

入三拾五匁八分　　。去過之分入
入廿三匁四分九厘　　。被下米代

阿　ん

一高四斗九升六合
高四斗九升六合
米成弐斗四合

一銀弐匁五分七厘　　。小もの成
一〃拾匁六分　　先割
一〃壱匁　　。通役
一〃六拾弐匁八分弐厘　　。去不足之分
〆　七拾六匁九分九厘

入壱匁三分九厘　　。被下米代

嘉蔵組
き　ぬ

内高九升三合周蔵ヨリ戻り
一高三石弐斗壱合
内弐合　引
残高三石壱斗九升九合
内八合　上田引
〆三石壱斗九升壱合
米成壱石三斗八合

一銀弐匁五分八厘　　。小もの成
一〃六拾八匁三分　　先割
一〃壱匁三分　　。通人別
〆　四拾弐匁壱分八厘

入六匁壱分七厘　　。去過之分入
入八匁九分七厘　　。被下米代

忠　蔵

一高拾石三斗四升六合
内六升三合　引
残高拾石八升三合

残高八石六斗弐升
内三斗三升弐合上田引
〆八石弐斗八升八合
米成三石三斗九升八合

一銀三匁　。小もの成
〃百七十七匁四分　先割
〃壱匁九分　。通人別
〆　百八拾弐匁壱分

入三拾五匁八分　。去過之分入
入廿三匁四分九厘　。被下米代

阿　ん

一高四斗九升六合
高四斗九升六合
米成弐斗四合

一銀弐匁五分七厘　。小もの成
〃拾匁六分　先割
〃壱匁　。通役
〃六拾弐匁八分弐厘　。去不足之分
〆　七拾六匁九分九厘

入壱匁三分九厘　。被下米代

嘉蔵組
き　ぬ

内高九升三合周蔵ヨリ戻り
一高三石弐斗壱合
内弐合　引
残高三石壱斗九升九合
内八合　上田引
〆三石壱斗九升壱合
米成壱石三斗八合

一銀弐匁五分八厘　。小もの成
〃六拾八匁三分　先割
〃壱匁三分　。通人別
〆　四拾弐匁壱分八厘

入六匁壱分七厘　。去過之分入
入八匁九分七厘　。被下米代

忠　蔵

一高拾石三斗四升六合
内六升三合　引
残高拾石八升三合

内四斗三升壱合　上田引
〆九石六斗五升弐合
米成三石九斗五升七合

一銀壱匁三分　。小もの成
〃弐匁五分　先割
〃弐百六匁五分　。通人別
〆　弐百拾匁三厘

入廿三匁七分七厘　。去過之分入
入廿七匁壱分弐厘　。被下米代

忠兵衛組
辰　蔵

一高拾壱石三升九合
内壱斗四升弐合　引
残高拾石八斗九升七合
内弐斗四升七合　上之上田引
〆拾石六斗五升
米成四石三斗六升六合

一銀五匁五分三厘　。小物成
〃弐百廿七分九分　先割
〃弐匁五分　。通人別

〆　弐百三拾五匁九分三厘
入廿七匁九分　。去過之分入
入廿九匁九分三厘　。被下米代

伊三郎

外高壱斗弐升弐合喜代蔵へ入ル
一高五石七斗五升五合
内壱斗五合　引
残高五石六斗五升
内四斗一升弐合　上田引
〆五石四斗三升八合
米成弐石弐斗三升

一銀拾壱匁四分七厘　。小物成
〃百拾六匁四分　先割
〃壱匁三分　。通人別
〃弐百六拾四匁六分七厘　。去不足之分
〆　三百九拾三匁八分四厘

入拾五匁弐分八厘　。被下米代

内四斗三升壱合　上田引
〆九石六斗五升弐合
米成三石九斗五升七合

一銀壱匁三分　。小もの成
一〃弐百六匁五分　先割
一〃弐匁五分　。通人別
〆　弐百拾匁三厘

入廿三匁七分七厘　。去過之分入
入廿七匁壱分弐厘　。被下米代

忠兵衛組　辰　蔵

一高拾壱石三升九合
内壱斗四升弐合　引
残高拾石八斗九升七合
内弐斗四升七合　上之上田引
〆拾石六斗五升
米成四石三斗六升六合

一銀五匁五分三厘　。小物成
一〃弐百廿七分九分　先割
一〃弐匁五分　。通人別
〆　弐百三拾五匁九分三厘
入廿七匁九分　。去過之分入
入廿九匁九分三厘　。被下米代

伊三郎

外高壱斗弐升弐合喜代蔵へ入ル
一高五石七斗五升五合
内壱斗五合　引
残高五石六斗五升
内四斗一升弐合　上田引
〆五石四斗三升八合
米成弐石弐斗三升

一銀拾壱匁四分七厘　。小物成
一〃百拾六匁四分　先割
一〃壱匁三分　。通人別
一〃弐百六拾四匁六分七厘　。去不足之分
〆　三百九拾三匁八分四厘
入拾五匁弐分八厘　。被下米代

讃岐路研修旅行記

志水美好

今年は七年ぶりに四国へ行くことになった。参加人数が減り二台では赤字が嵩むので、昨年からバス一台だけということにしていた。今回は補助椅子でもいいという会員を受け入れて、我々五十四名の一行は八時ちょうどに山崎を出発した。天気は上々の旅行日和であった。

久保副会長の挨拶を聞きながら竜野インターから山陽自動車道に乗り入れた。備前と倉敷の間が開通したので、竜野から四国の坂出までノーストップで走れるから大変便利になった。吉備のSAでトイレ休憩。五重塔をイメージした高い望楼が吉備のシンボルとして建っている。瀬戸大橋を通るのは郷土研究会としては二度目である。海は穏やかで行き交う船の航跡も美しく、与島の岸壁の咸臨丸もはっきりと見えていた。

瀬戸内海を一息に渡って、十時過ぎに坂出インターから下りる。下見に行った後、善通寺まで高松自動車道を走るようコースを変更したつもりだったが、連絡がとれてなかったのかと不審に思った。讃岐富士やゴールデンタワーを車窓から眺めながら、浜街道を多度津へ走った。道路は割合すいていて十時半多度津の道隆寺についた。

新築の堂々たる山門が建っていて、仁王さんの立像と大わらじが先ず目についた。七十七番札所の大きな石柱が門前に立っている。眼なおし薬師として大勢の信仰を集めている寺で、遍路さんのグループが次々とつめかけている。小豆島の八十八か所の小さなお堂を見慣れているので、四国の八十八か所の大寺院には圧倒された感じがした。道隆寺の参拝をすまして次は善通寺市の金倉寺に向った。多度津の道は狭く、道ばたのあちこちの田では麦刈がすんで麦わらを焼いている。空はどんよりと曇って来たし、立ちのぼる煙と低い雲が一体になって、夕暮時のように霞んでしまっている。

十一時前、七十六番札所金倉寺に到着した。横手の狭い入口から入ったが、境内は広々としていて多くの堂宇が建ち並んでいる。本堂の正面にある大きな繰り数珠が珍しかった。明治の頃客殿が乃木将軍の宿舎になっていて、東京からはるばる将軍を訪ねて来た静子夫人を会わずに追い帰した

きれいなカラープリントの店

Specialty Camera Shop
コーエーカメラ

本店　宍粟郡山崎町東鹿沢26－3　☎62－2089
フリーダイヤル　☎0120-440-990
FAX0790-62-7429
咲ランド店　TEL0790-63-0533

という話が有名である。築山のそばに「乃木将軍妻返しの松」があった。案外に木が小さいので二代目の松だろうかと考えた。駐車場の近くに「お砂踏み八十八か所」があったので、大急ぎで砂を踏んで廻った。十一時十五分金倉寺を後にする。

適当な昼食場所が近くにないらしく、善通寺を通り越して琴平町まで南下する。可成り遠いと思っていたが二十分程で「こんぴら丸」に着いた。金刀比羅宮から一粁程離れた小高い丘の上にあったが、社殿は曇り空でかすんでしまっていた。こんぴら丸は大きな木造船の形をした建物で池に浮いたように作られている。内部は広々としていて船の胴の間が食堂になっている。さぬきうどんに舌鼓を打つ。昼食後は二階のオルゴール館を見たり、別棟の特産物コーナーで土産物を買ったり、盆栽センターの松の盆栽を見たりして時を過ごした。

十二時四十分こんぴら丸を出発し、金刀比羅さんの南方に当る三七七号線を通って観音寺市へと向った、高速道路を通る方が速いと考えていたが、四国の道は車が少ないので一般道でもそれ程時間がかからないらしい。地図を見るとややこしいと思われる道を運転手は迷いもせず、一時二十分観音寺市の観音寺に着いた。

琴弾山の麓にある観音寺は石段を登った所に小さい堂宇が散在していて、どこへ詣ったものかと迷うようであった。本堂は小じんまりした建物であるが、室町時代の再建で国の重要文化財に指定されている。昭和三十六年解体修理された朱塗りの立派な建物で六十九番札所になっている。更に石段を登った所にある神恵院は六十八番札所であって、四国霊場で唯一の珍しい一寺二霊場となっている。

琴弾山の頂上が銭形展望台になっているが観光バスは通行禁止なので、観音寺の横手から山道を登ることになった。道は舗装してあったので登り易く十分程で頂上の展望台に着いた。テレビでお馴染みの大きな砂の銭形が見おろされる。東西百二十米、南北九十米もある巨大な砂絵で、宝暦十年藩主の領内巡視を歓迎するため、領民が一夜で作りあげたと言われている。あいにくの曇り空で陰影がはっきりしないため、特有の銭形が浮き上って見えず残念でした。思い思いに眺めを楽しんで早々に下山することにした。

琴弾公園の一角に世界のコイン館、郷土資料館、総合コミュニティセンターが一所に並んでいる。コイン館には日本の貨幣、世界の貨幣を始めポリネシアの石の貨幣や各種の記念コインが沢山

おくすりの相談と処方せん受付
ごこう薬局
薬剤師 岸本八重子
薬剤師 岸本弘子
山崎町東和通り・☎(0790)62－1190

展示されていた。ゆっくり見ている時間がないので大急ぎで一巡するだけになってしまい惜しかった。隣の郷土資料館には縄文・弥生時代、古墳時代の出土品から火縄銃などの武具まで陳列してあり、特別展として大庄屋西山家文書が展示されていた。コミュニティセンターもちょっと覗いて見ると、秋祭りに奉納される勇壮な「ちようさ」太鼓台の実物が中央に飾られていた。三時から館前のからくり時計が動くという放送があったので急いで外に出た。高さ五・五米のからくり時計が時報に合わせて、民族衣装のかわいい人形の楽しい動作を見せてくれた。

三時十分すっかり曇り空になった観音寺市を後にして帰途についた。さぬき豊中インターから高松自動車道に乗り入れた。車中では会員提供の「歴史街道」のビデオを見せてもらった。途中与島へ寄ってお土産を買う方のため暫しの時間をとり、瀬戸PAでトイレ休憩しただけで一路車を急がせた。順調に走り続け、六時少し前に竜野インターをおり、山崎へは六時半全員無事に帰着した。天候は昼前からどんよりと曇ってしまったけれど、暑さも適度な旅行日和の中で、讃岐路の旅を充分楽しめたと喜んでいる。皆様の御協力に対し厚く御礼申し上げます。

銭形を眺むる松のみどり濃し　高野薫風

薫風にカラクリ時計廻り初む　高野薫風

スクイム市訪問記

大谷司郎

本年七月二十六日から八月三日までの九日間、山崎町が初めて実施する中学校生徒と教師のスクイム市派遣研修事業が行われました。私は、派遣団長の小畑教育長と共に、引率者として参加させていただきました。

アメリカ合衆国ワシントン州のスクイム市と山崎町は、平成五年六月に姉妹都市提携を結び、以来山崎町国際交流協会が発足するなど、国際化時代に対応した取り組みが展開されてきました。

本年五月には、スクイム市灌漑水路布設百周年記念の大きなイベントが実施され、山崎町からコーラスグルー

プや踊りのグループの会員合わせて八十名ほどがスクイム市を訪れ、パレードや祭りに参加し花を添えました。

今回、私たちが訪問しましたのは、「第一回山崎町国際理解交流活動スクイム市派遣団」で、町内四中学校からそれぞれ二名ずつの八名と小中学校教師七名、団長と事務局の計十七名でした。ホームステイを中心とした研修で、観光旅行だけでは味わえないスクイムの人たちの人情や習慣に直接触れることにより、次代を担う青少年や、それを指導する教師が視野を広め、真の国際理解を深めようとするねらいで実施されました。

関西国際空港からシアトル・タコマ空港まで直行便ができてワシントン州が随分近くになりました。シアトルには、兵庫県がワシントン州と姉妹提携をしている関係で、駐在員を置いた「兵庫文化交流センター」があります。そこの寺畑所長さんからワシントン州と日本人の歴史的かかわりについて興味深い次のような話を拝聴しました。

西暦一八三二年（天保三）十月に、尾張名古屋から江戸に向けて船出した千石船「宝順丸」が航海中暴風雨に遭い、漂流すること十四カ月、ワシントン州の最西北端ニヤーベイのフラッタリー岬に漂着したということです。命からがら上陸したのは音吉、岩吉、九吉という三名の少年でした。この少年たちはその地でインデアンに救われ、同州のコロンビア川沿いのフォートバンクーバに連れて行かれ、ハドソンベイカンパニーで英語教育を受け、それぞれ成人しました。そのころ日本は鎖国政策をとっており帰国することもできず、マカオなどでその生涯を送ったということです。

これは百六十年前のことですが、命がけでアメリカにたどり着いた少年たちと、八時間のフライトで疲労を感じながら到着した私たちを比較しながら、何かを訴えられているような気がしました。

このエピソードはスクイムの歴史学習のときにも、聴くことができました。その内容を掲載した本が発行されていることも教わりました。著書名『An Ocean Between Us』だそうで、もちろん英語版で私には読めそうもありません。もしかして、日本語版に翻訳されているのがあるかと淡い期待を持って帰国しました。ある会議でこの話をしていますと、『音吉少年漂流記』（旺文社）があることを知り、読んでみますと内容が一致しており、感激をしたところです。この本はどちらも私の方で入手いたしておりますのでご希望の方があればお知らせください。

スクイムは緯度で言うと、北海道の稚内よりもまだ北に位置し

ますが、太平洋の暖流の影響で温帯性気候、夏は涼しく、冬は比較的温暖で雪が降ることは稀という過ごしやすい土地だそうです。私たちが訪れた七月下旬は、日本では摂氏三十五度にも気温があがる一年中でいちばん暑いころですが、スクイムでは、二十度前後の気温で空気が乾燥しており、日陰では肌寒ささえ感じました。

コロンブスがアメリカ大陸を発見したのが約五百年前ですが、インデアンがすんでいたこの地へ白人が入居したのが一八五〇年ころで、土地は砂漠に近い状態でところどころにサボテンが生えているという西部劇にでてくるような荒野だったそうです。一八六〇年初めての選挙がおこなわれ、一八七九年はじめて郵便局ができたとのこと。「Sequim（スクイム）」はそのころ「Seguin（スギン）」といっており、一九〇七年、現在のスクイムになったとのこと。それからしばらく郵便局だけがスギンの呼び名を残したそうです。涌き水を利用して緑のない土地に少しばかりの耕作が行われていましたが、イナゴの大群が発生するなど農耕には不適な地域でした。その後、この地に灌漑用水を引き込む許可が出され、ダンジネス川から水路を引くことにより、植物が育つようになって、家畜を飼い、人々が集まるようなったということです。今年が灌漑用水を布設して百年経つと言うことですから、開拓には随分の苦労があったものと思われます。今も牧草地のあちこちで大型の散水機が白い水しぶきをあげている風景が見えます。

その後、電話が開通したり、銀行や製材所などもでき、産業経済活動も盛んに行われるようになって、一九一三年はじめてスクイム市となり、市長選挙が行われたということです。

スクイムの街は、こちらのように密集した感じはありません。中心部を国道一〇一号線が走っており、それと並行して幾筋かのストリートがあり、直角にアベニューがあるというゆったりめに区画整理された街です。街はずれには放牧場などがあり、牛や馬がのどかに草を食んでおり、ゆるやかな緑のスロープの中に閑静な家屋が点在しているという、全体として牧歌的な印象を受けました。

仕事柄、まず学校へ案内していただきました。小学校、中学校、ハイスクールと回るうち、コンピュータが子供たちの学校生活の中に溶け込んでいることに驚きました。日本では中学校でやっとコンピュータ教育が制度化されたところです。次に百年前の「一教室学校」に案内されました。手入れされた草むらの中に黄色い花をつけたタンポポモドキが一面に生えていて、ひっそ

りとたたずむ学校が印象的でした。ＮＨＫで放映された「大草原の小さな家」に出てくる学校をふと思い出しました。今は使用されていませんが計画的に子供たちをそこへ連れていき、当時の学校のことを教えるそうです。生きた郷土学習がされていることを羨ましく思いました。その学校の屋根はなんと板葺でした。注意してほかの建物を見ていると結構板葺が多いのに感心しました。湿度が低いからこそ長持ちするのだろうと独り合点をしました。

次の日、ボーイスカウトのキャンプ場（ Camp Parsons ）へ案内されました。全面積二五〇エーカーあるという広大なキャンプ場で、篤志家のボーイスカウトの先輩が土地ごと寄付されたもので、浜辺あり山ありでいろいろなアウトドア体験ができる施設でした。ワシントン州の各地からボーイスカウトが一定期間ここでキャンプ生活をしているようです。その日は約三百名のキャンパーがいました。その施設の中に博物館（といっても木造の小さな小屋風）があり、係の人がこのキャンプ場の歴史を写真や文献を示しながら説明してくれました。いかにこの施設がすばらしいかということを自信を持って解説してくれる説明ぶりと態度に感心しつつ、この施設にも歴史を実感できる具象物があることに心を打たれました。

また別の日、スクイム市の博物館へ行きました。北米ではじめて発見されたという一億二千万年前の恐竜マストドンの巨大な骨が展示されていました。農夫が畑で池を造ろうと掘っていて偶然発見されたそうで、ワシントン大学の研究チームが調査をし、同じ土層の花粉を分析することで年代を推定したとのことです。

百年にしかならないスクイムの歴史ではありますが土地の人たちが、あらゆる所で保存し、語り継いでいる姿勢には学ぶことが多かったと思います。日本で博物館といえば目を見張るようなすばらしい建物で、その中には保存加工や盗難防止の大掛かりな施設が整えられてはじめて展示できるというイメージですが、スクイムのそれはさりげなくその場に置いてあるのが似合うような簡易な施設の様に見受けられました。なにも御国自慢を言っているのではなく、自分たちの先人の確かな歩みを誇りを持って語り継いでいる姿こそ私たちが忘れていることではないでしょうか。

以上九日間の研修の中で、歴史的事項に関して私が感じたことを述べてみました。

呉服とジュエリー
とくさや
本店　本町（さつき通り）62-1680
咲ランド３Ｆ呉服のとくさや　63-0568
〃　２Ｆジュエリーとくさや　63-0557

『鹿沢城搦手（からめて）門石碑』の設置について

史跡部

搦手とは、お城の大手に対し裏手のことを云います。

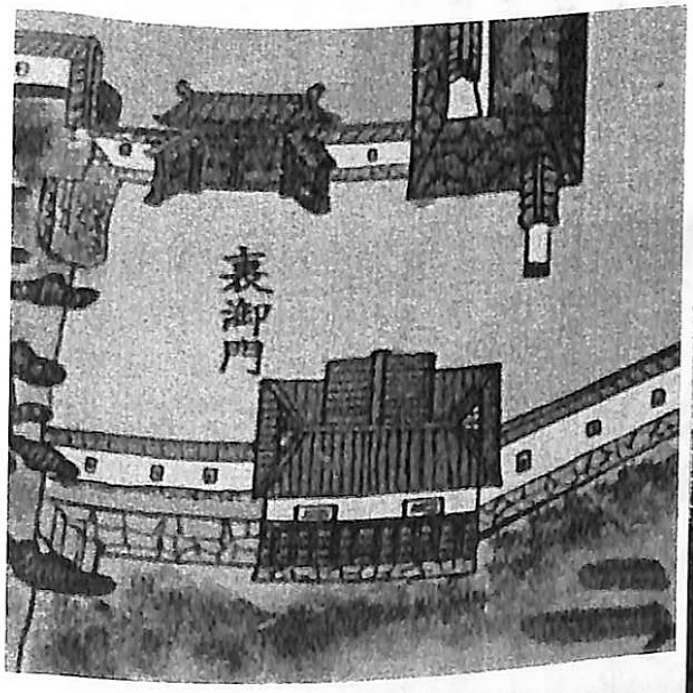
史跡部の平成七年度の事業として、山崎小学校の新しい体育館の東門の前の花壇の北の端に写真の様な石碑を設置しました。設置にあたっては、大谷会報部長、史跡部の伊藤町会議員にお骨折りを頂き、教育委員会の許可及び山崎小学校の快諾を得て、去る七月二七日に完成致しました。

石碑の左側面から背面にかけて次の文を刻んでいます。

この所は、鹿沢城搦手として裏門への入口となっていた。初めは、元和元年の築城当時より松平氏三代の三万石時代まで城の大手口となっていた。

ところが、本多氏一万石の陣屋となってから何時となく搦手となり、大手は中門下の北側入口に変わった。

幕末には、年貢米収納の時期だけ門が開かれ普段は閉じられていた。ここより南は石垣の断崖で道は無かった。明治十年代になって旧藩士遠藤亘氏の発案にて城下へ向けての新道路ができたのでこの坂道を遠藤坂と言った。



事務局だより

◉ **秋の研修旅行参加のお願い**

先の春の研修旅行は、たいへん好評であったため参加希望の方が多くバス一台定員四十五名のところ、二十名余り超過したため、九名の方には補助席で我慢していただいて五十四名の方に参加していただきましたが、なお、十名余りの方々にはお断わりさせていただいた次第です。

このことの反省に立ち、今回はバス二台を準備致しました。会報折込の旅行案内の通りです。

会員の方々お誘いあわせの上、多数の方々ご参加をお願い致します。

◉ **過去三ケ年の会員数の推移**

平成五年度（六五七）
平成六年度（六三六）
平成七年度（五八〇）